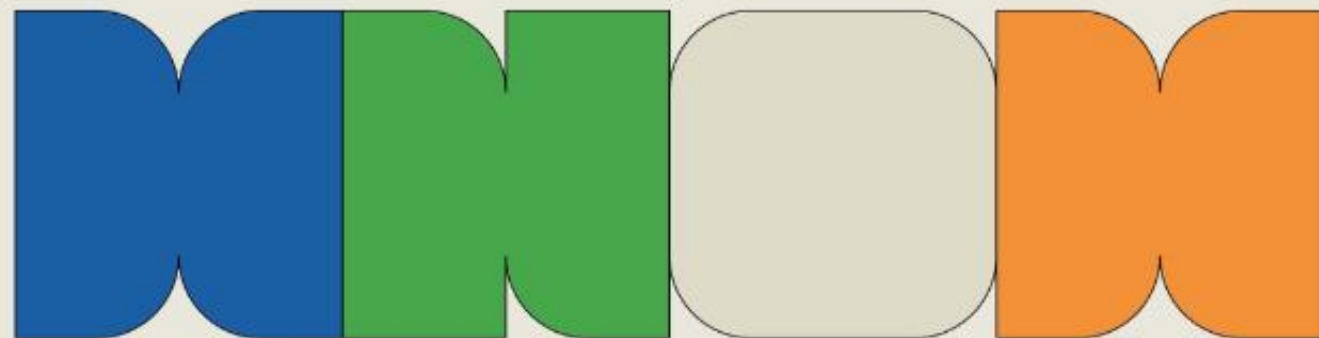




北杜市有機農業情報サイト



HELLO! NEXT ORGANIC HOKUTO

ハロー！ネクストオーガニックホクト

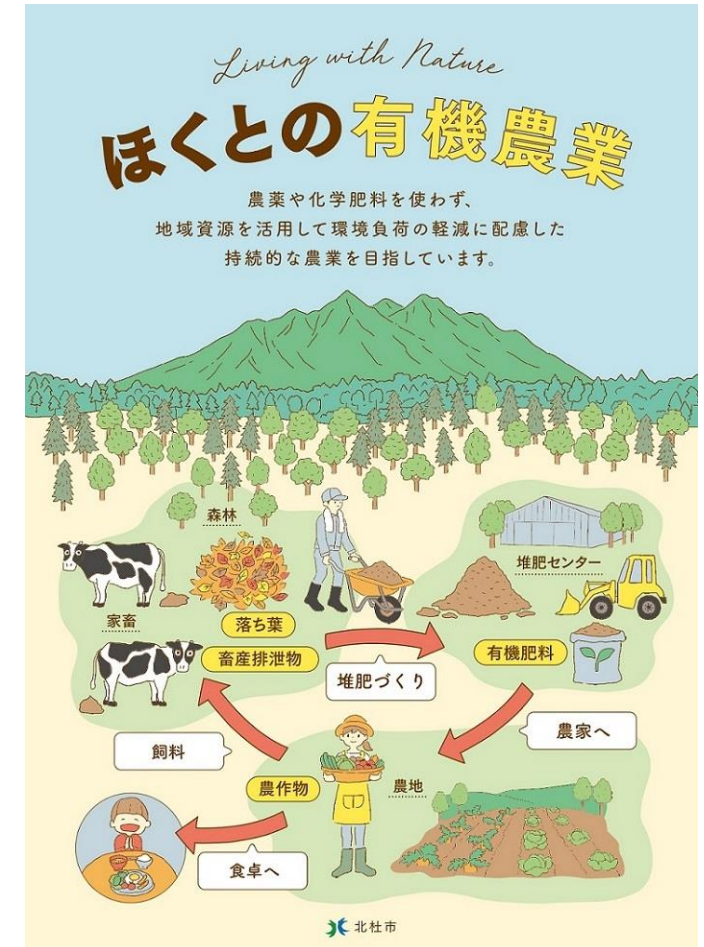
オーガニックビレッジ宣言を地域の力に

—「食と農」から、「持続する地域」へ—

山梨県北杜市 農政課 浅川裕介

—「食と農」から、「持続する地域」へ—

- 01 「食と農」から始まった
- 02 なぜ、北杜は有機なのか
- 03 有機×スマートという選択
- 04 有機を「地域」で支える
- 05 有機農業を、丸裸にする



01 「食と農」 から 始まった



01 「食と農」 から始まった

「有機」は、突然始まったわけではない。

- 平成19年今治市・安井孝氏との出会い
 - 平成22年「食と農の杜づくり課」設置
 - 「栽培・調理・共食」を軸に食農教育を展開
 - 教育ファーム、親子食育、学校給食などへ展開
- ※保育園園庭に畑を設置し、有機農業を実践



栽培



教育ファーム

調理



おやこ食育教室

共食



地域に根ざした
学校給食感謝祭

01 「食と農」 から始まった

今治市と北杜市の比較

内 訳	今 治 市 重 量 割 合	北 杜 市 重 量 割 合
市内産一般野菜・果実	29.1%	30.3%
市内産有機野菜・果実	7.7%	0%
市内産無農薬野菜・果実	3.1%	10.3%
県内産一般野菜・果実	19.8%	11.9%
その他一般野菜・果実	40.3%	47.5%

出典：安井孝『地産地消と学校給食（2010）
および北杜市資料

流行では、地域は変わらない。

有機だからやる。

地産地消が流行っているからやる。

カーボンニュートラルだからやる。

それでは、壁にぶつかったときに続かない。

大切なのは、「なぜ、この地域でやるのか」

という目的を共有すること。

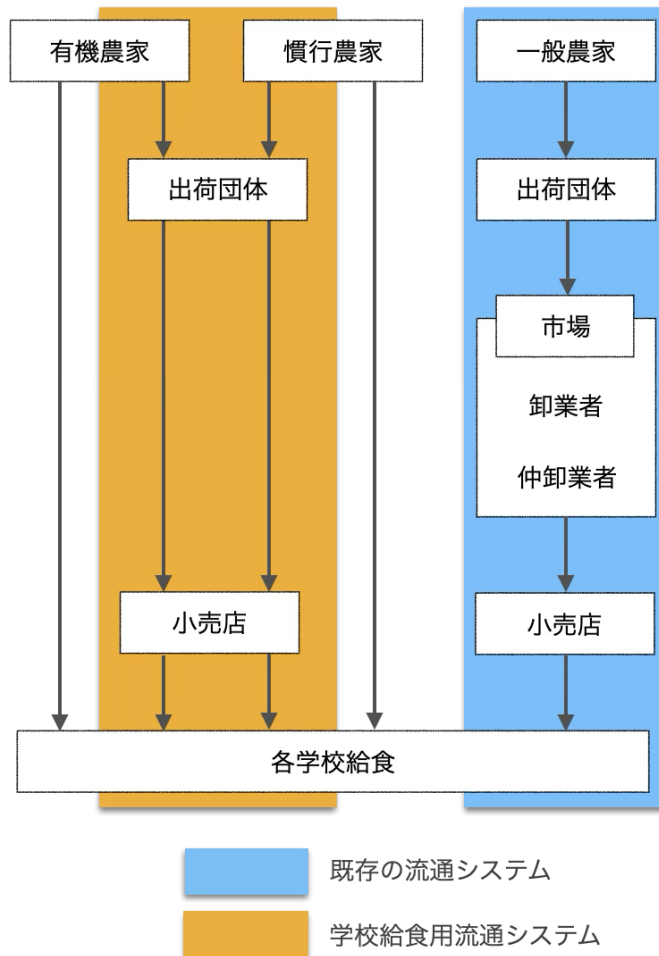
担当者が変わっても取組が続くためには、

制度だけでなく、「目的」と「考え方」

を継承する必要がある。

01 「食と農」 から始まった

地産地消給食フロー



作るだけでは、地域農業は続かない。

「どう作るか」だけではなく、
「どう届けるか」までを設計すること。

- 流通を簡素化
- 学校給食への供給体制を構築
- 地産地消を地域経済につなげる
- 有機・無農薬農産物の利用を拡大

地産地消率：17.5%(H19)→35.6%(H20)

※お米と野菜の重量ベースの地産地消割合

01「食と農」から始まった

有機農業を、「給食」から地域に広げる。

平成21年8月25日から学校給食への有機農産物導入



地元の有機野菜 おいしい給食に

北杜市の農事組合法人「ハケ岳やさい倶楽部」(梶原雅巳代表理事)は、市内7小中学校の給食の食材として、有機野菜の出荷を始めた。月当たり約3000kgの出荷が可能と見込んでおり、年間を通して新鮮な野菜を提供する方針。市農政課は「これほど多くの有機野菜を給食用として継続的に出荷するのは県内では珍しい」としている。

北杜市の市内7小中学校へ出荷

峡北甲斐

学校給食用に出荷している
ハケ岳やさい倶楽部

有機野菜は通常の野菜に比べて比較的高い上、流通ルートの確保などの課題があり、市では導入する機会がほとんどなかった。市は7校での試行を踏まえ、残る17校に拡大するか検討する。同法人は今後、サツマイモやキャベツ、大根も出荷品目に加える予定。担当者は「少量ながら、継続して出荷すること、子どもたちが地産地消や食の安全を学ぶきっかけになれば」と話している。

山梨県北杜市 給食センター

山梨県北杜市須玉町の市立北杜南学校給食センターは今年4月から、市内で有機野菜栽培に取り組む農事組合法人ハケ岳やさい倶楽部(くらぶ)との取引を始

めた。食材を通じて食育を広めようと、両者は春先から協議を進め、このほどキュウリやカボチャ、ピーマン、ナスなどから利用を始めた。



納品されたピーマンを確認する伊藤センター長(左から2人目)ら

規格外も
活用する
旬生かし食育推進

同センターは今年4月、生徒向けに1450食をオープン。小学校5、作っている。校、中学校2校の児童・同センターに滞在する

栄養士の小野和子さんは「入荷が予定されている野菜を基に献立を作っている。調理師には、従来使われていた冷凍品と比べて、旬の野菜の味を生かすことができる」と説明。「地元の野菜は食感も味も違う」と話す。

センター長の伊藤雄次さんは「JA北杜産の特別栽培米も使うなど、地産地消を進めている。調理法を工夫するなどして、野菜の規格外品も使っていきたい」と話している。

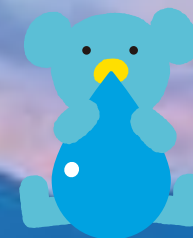
学給に地元の有機野菜

子どもたちにも好評だと話す。

同倶楽部の佐藤三男さん(54)は「安全で安心できる旬の有機野菜を子どもたちに食べてほしい。来春からはさらに品目を増やしていきたい」と話す。

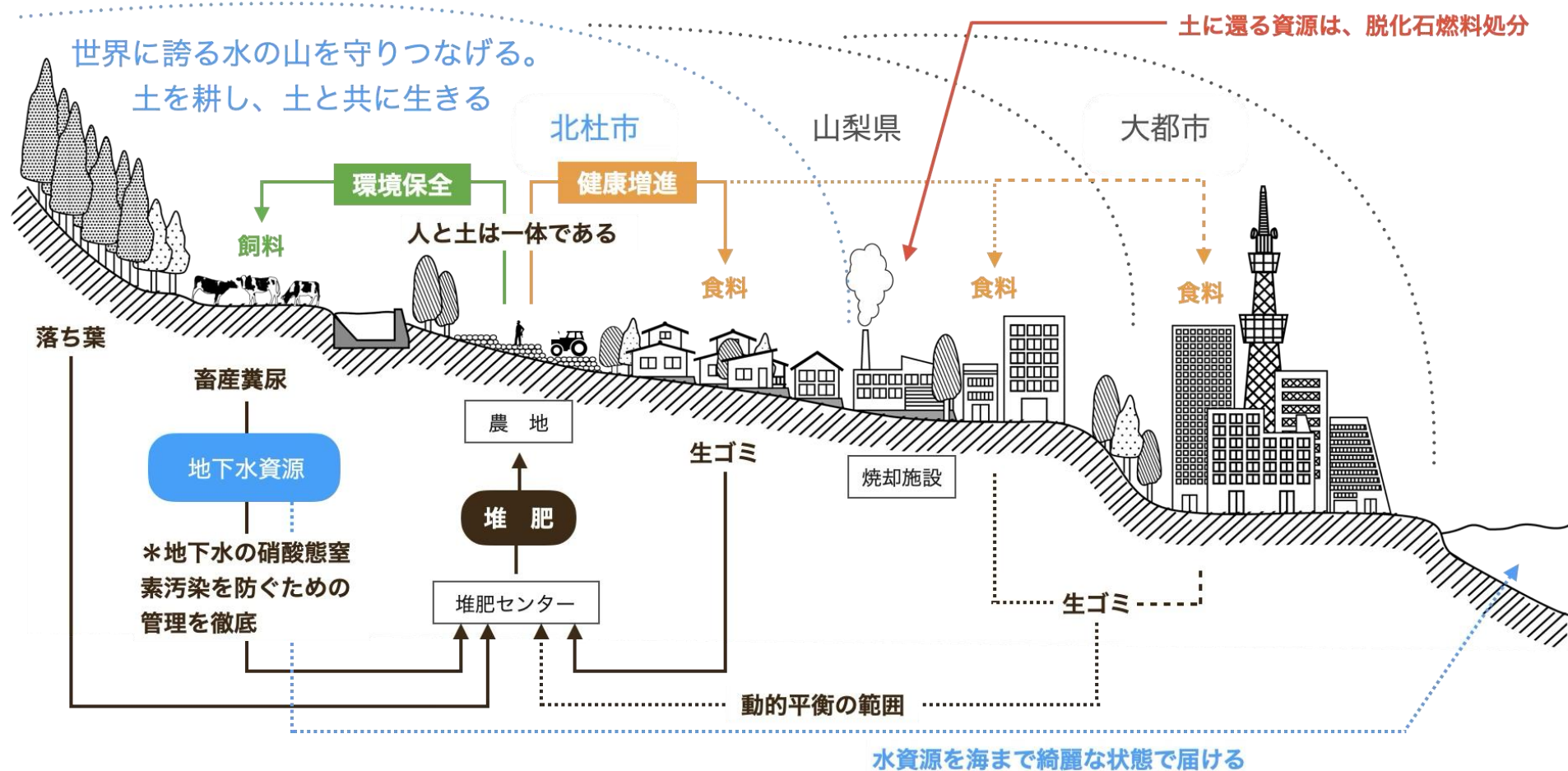
02 なぜ、北杜は 有機なのか

世界に誇る
「水の山」プロジェクト



02 なぜ、北杜は有機なのか

北杜市の農業が目指す将来像



03 有機 × スマート という選択



03 有機×スマートという選択



有機農業を広めるにあたり避けて通れないこと「農家の経営」

「環境に良い」だけでは、農業は続かない。

有機農家が陥りやすい落とし穴

「反収」×「単価」→「高単価に寄りがち」

重要となるのは、「販売力」

「反収」×「単価」×「販売力」

品目ごとの経営戦略が鍵

「やりたい農業」と「稼ぐ農業」の区別

「稼ぐ農業」には、

「スマート農業」が有力な選択肢になる。

03 有機×スマートという選択



特に機械化された水稻経営における壁は「設備投資」

「小さく有機」だけでは、経営は伸びない。

バインダー＆ハザ掛けには限界がある。

経営面積を慣行ほど拡大できない有機農業において

「反収（－）」×「単価（＋）」では、無理

重要となるのは、「新しいタイプの担い手育成」と「地域連携」

「慣行」＋「有機」＝設備投資を分散

みんながコンバインと乾燥機を持たなくても良い。

出口に見合った栽培体系が重要となる。（B to B or B to C ?）

「こだわる農業」と「稼ぐ農業」の区別

04 有機を「地域」 で支える



04 有機を「地域」で支える



「どうやって作るか」とか「どうやって売るか」
だけでなく

「どうやって農業を続けるか」

「どうやって地域の担い手を増やすか」

「どうやって新しい技術を使うか」

が重要であり

有機農業を「農家だけの問題」にしない

「有機農業を増やす」ことと

「有機農業が続く地域をつくる」ことは違う

05 有機農業を、 丸裸にする

有機農業白書 Vol.1

～現状把握から将来展望へ～

Japan's Organic Agriculture Vol.1

From the Current Status to Future Prospect

- 2024 -



株式会社 坂ノ途中

05 有機農業を、丸裸にする



① 「希望する土地」で始めやすい 87%

北杜市の新規参入者のうち、**87%**が希望する土地で就農。
全国調査の49%を大きく上回ります。

② 行政の支援が、届いている 78%

新規参入者の78%が、営農について自治体から「十分得られている」または「十分ではないが得られている」と回答。全国の61%を上回ります。
出典) 坂ノ途中 (2024) 有機農業白書Vol1：現状把握から将来展望へ

③ 「新規参入だから不利」とは限らない

北杜市では、就農後の経過年数が同程度と比較すると、新規参入者と新規自営就農者（跡継ぎ）の売上に明瞭な差が認められませんでした。

④ 「一人で頑張る」ではなく、「仲間がいる」

北杜市では、有機生産者・生産者グループが多く、生産者同士が支え合える環境があることが示唆されています。

自然とともに生きる。
北杜の有機農業。

「有機」を増やすのではない。
「農家が育つ環境」をつくる。

「日本」の太陽の恵み
と「清らかな水」、「肥沃な
土壌」など自然環境に恵
まれた北杜市では、安全
安心でおいしい農作物が
育まれています。

北杜市では、この美しい
自然環境を、次の世代を
担う子ども達にしっかりと
引き継ぐために、自然に
やさしい有機農業を応援
しています。

生産者の想いが「ぎゅっ」
と詰まった有機農業によ
り育まれた農産物をみな
さんの食卓へ。